様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　3　月　31　日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008～2011 年度
課題番号：２０７２０１２０
研究課題名（和文）　明治大正期関西弁の史的研究

研究課題名（英文）　Historical research of Kansai dialect in Meiji and Taisho period

研究代表者
村上　謙（MURAKAMI　KEN）
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：２０４３１７２８

研究成果の概要（和文）：これまで未開拓の分野であった明治大正期の関西弁資料の発掘とその資料的価値の検証をおこなった。具体的には、上司小剣による関西弁小説群と曾我廼家五郎による脚本類などである。またその検証結果をもとに、明治大正期の関西弁における文法問題の抽出、及びその研究と解明をおこなった。具体的には待遇表現や否定表現、音変化のあり方などである。

研究成果の概要（英文）：Historical research of Kansai dialect in Meiji and Taisho period as below;
(1) collecting many undiscovered resources, such as the novels written by Shoken Kamitsukasa(1874-1947), and the screenplays by Goro Soganoya(1877-1948)
(2) making archives by converting the resources into the digital text data
(3) researching some specific issues about Kansai dialect, e.g. honorific, negative expression, and sound changing system

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：日本語史

１．研究開始当初の背景

関西弁の歴史的研究は 1950 年代後半に島田勇雄や前田勇、楳垣実等によって開拓された分野であるが、70 年代に寺島（岸田）浩子や矢野準等、90 年代に金沢裕之が現れたほかは、研究者も殆どいないという状況であった。従って最近までは論文等の研究の蓄積も極めて乏しく、参照すべきものもなかった。また、日本語史の概説書類においてもこの分野についてはまったく取り扱われて来なかった。特に、近世後期より後、つまり明治、大正期の関西弁の動向についてはほとんど手がつけられていない分野であって、日本語史学的にも方言学的にも早急な対応が必要であった。

そこで今回、科研費補助金を得て、明治大正期の上方語、関西弁の研究を行いたいと考

えたのである。

２．研究の目的

明治大正期の関西弁資料の発掘とその資料的価値の検証。また、明治大正期の関西弁における文法問題の抽出、及びその研究と解明。

３．研究の方法

簡潔にまとめれば以下の 3 点である。箇条書きする。

(1)上司小剣による関西弁小説の収集と基礎的調査、曾我廼家五郎による脚本資料の収集と基礎的調査、その他の関西弁資料の発掘

(2)それぞれの資料的価値の検証と明治大正期関西弁の特徴の抽出

(3)それらを用いた個別具体的な課題についての研究

４．研究成果

以下、年度ごとに詳細を記す。

(1)2008 年度は明治大正期関西弁資料として重要であると思われる 2 種類の資料の収集を中心に行った。具体的には、以下のとおりである。

①上司小剣による関西弁小説の収集と基礎的調査

②曾我廼家五郎による脚本の収集と基礎的調査

上司小剣作品群については、いくつかの作品をテキストデータ入力する機会を得、そのための謝金を支出した。その結果、用例調査、分析などが極めて効率的に行えるようになった。

本年度、順調かつ円滑に資料収集とテキスト化が行えたことは、以後 4 年間にわたる研究期間の初年度の基盤整備として、大変堅実かつ有意義であった。

(2)2009 年度は前年度に引き続き、資料収集を行った。また、収集した資料の口語資料としての資料性について、否定表現形式のあり方から分析した。

その成果のひとつとして、平成 21 年度近代語学会で口頭発表を行った（題名：「明治大正期関西弁資料としての上司小剣作品群の紹介および否定表現形式を用いた資料性の検討」）。なお、その際、SP 盤文字化資料における否定表現形式との比較検討を行い、学界に有益な知見を提供した。

なお、この口頭発表をもとに、次年度、同題の研究論文を発表することになる。その意味でも、極めて重要な口頭発表の機会であった。

(3)2010 年度は前年度に引き続き上司小剣を中心とした明治大正期関西弁資料の資料的価値の検証をおこなった。

その成果を、学術論文「明治大正期関西弁資料としての上司小剣作品群の紹介および否定表現形式を用いた資料性の検討」（『近代語研究第 15 集』（平成 22 年 11 月刊））として公刊した。本稿では明治大正期関西弁資料の一つとして上司小剣による関西弁小説群を紹介し、否定表現形式およびその体系性のあり方をもとにその資料的価値を論じた。こうした諸検討によって、小剣作品の資料的価値が SP 盤のそれよりもやや「新しい」可能性はあるものの、明治大正期関西弁資料として決して劣るものでないことを実証的に示した。

これまで SP 盤は「一級資料」として用いられてきたが、実はその資料性は子細に検討されぬままであった。しかし、SP 盤が落語という「型」の影響を受けやすいジャンルであることを考えると、一級であるかどうかは本来、疑問符がつけられるべき資料群であった 。今回、小剣作品と比較検討することによって、（個別的な問題はあるものの、）SP 盤の資料性も逆に保証されたと言える。

また、大正末年生まれの関西弁漫才師「夢路いとし喜味こいし」の DVD を収集し、大正期以降の関西弁の流れを検討した。

また、資料収集の過程で得られた成果の一部を学術論文「対照表形式の近世後期上方語彙資料」（埼玉大学国語教育論叢 13）として公刊した。冒頭部分を以下に引用しておく。

> 日本語史学の入門書や概説書などにおいて、近世後期の上方語というと、方言対照表とでも言うべき『浪花聞書』（文政 2）や『新撰大阪詞大全』（天保 12）、また、『浮世風呂』（文化 6）での上方者と江戸者の方言会話部分、が取り上げられることが多いように思う 。確かに、これらの資料は面白いし、使いやすい。しかしその一方で、これらに類する資料が他に多く残っていることはあまり知られていないようである。また、そうした資料情報の共有が行われていないことに対しても筆者は強い危機感を覚える。後期上方語資料を紹介したものとしては夙に島田勇雄（1959）、前田勇（1957）などがあり、長らく大きな指標とされてきたが、いずれも公表から半世紀

が経過し、その補填を行う必要もある。

こうした問題意識のもと、本稿ではその取り組みの一環として、『浪花聞書』などに代わる対照表形式の近世後期上方語彙資料を、先学の挙げたものとの重複をなるべく避けつつ、いくつか紹介し、参考に供した。具体的には、上方出身者による随筆類、上方洒落本、非上方出身者による見聞記類、に分類し、紹介した。

また、同じく資料収集の過程で得られた成果の一部を学術論文「近世後期上方における音変化の諸相」（埼玉大学紀要（教育学部）60-1）として公刊した。

本稿では後期上方語における音変化について分類、記述してある。具体的分類方法としては、拍を中心に分類を行い、拍数が単純に増減するものをそれぞれ「添加」「脱落」（鉤括弧つき）とし、拍内での変化（頭子音や尾母音の交替といった変化）を「交替」とした。また、拍数の減少と拍内での変化の両者にわたるものを「融合」として分類した。これによってさまざまな音変化形が分類でき、その結果、近世後期における音変化傾向がどのようなものかを示すことができた。これは、明治大正期関西弁の音変化のあり方を解明するためにも重要な基礎的調査であって、有意義であった。また、用例収集に際して得られた印象から、様々な音変化形が容易に見出せる点、前期の状況とは明らかに異なっていることを明らかにした。これを、前期において萌芽した諸変化が高頻度化して量的に充実してきたものとして捉え、後期上方語が前期上方語から独自の方向に向かって進んでゆく、その一過程を表すものとして把握した。

(4)2011 年度は現代関西弁の代表的語法であるヘンの成立について考察し、新たな知見を得た。その成果を「明治期関西弁におけるヘンの成立について―成立要因を中心に再検討する―」(近代語研究 16) として公刊した。これはこれまでの学界の水準を大きく超えるとともに、当該分野に新しい研究手法や研究視点を提供するものとして画期的なものとなるはずである。要旨を以下にまとめておく。

○これまでヘンの成立過程については音変化説があるものの、成立要因に対する説明はなかった。

○成立過程および成立要因としての音変化説には様々な問題があって認めがたい。

○明治期、ヌ（ン）とナイの東西差意識やデアル文の多用によって、アル文否定時の非対称性が強調され、それを克服するためにヘンが成立した。

○これで、上接語の偏り、成立時期、活用形の偏り、接続面のゆれ、などが説明できる。

○具体的な成立過程は、オマヘン、マヘンからの異分析で説明できる。また、ハセヌからの音変化形ャヘンの存在もそれを助長した可能性がある。

また、論文執筆と並行して、近世上方語資料における用例調査方法についての情報提供と、新たな検索方法の構築を、国立国語研究所主催の研究発表会で論じた。すなわち、「『手作業』による用例検索を専らとする一研究者が通時コーパスを使ってみる ―動詞否定形式「～ハセヌ」類における上接動詞の通時的なあり方を例に―」（国立国語研究所「通時コーパスの設計」研究発表会，2011 年 9 月、国立国語研究所）である。

これについてやや詳しく述べると、本発表では、近世語研究分野における用例収集の現状や、発表者自身の用例検索方法、検索精度などについて報告するとともに、現在開発中の通時コーパスの長所を生かした活用例を考えた。具体的には、動詞否定形式「～ハセヌ」類における上接動詞の通時的なあり方を例に、用例検索時の簡便さについて述べた。さらに現時点における古典語通時コーパスの使用感などを報告した上で、今後の改善点などを提案した。

上記のように、この 4 年間は十分な研究資金と、研究環境を得、さまざまな発表の機会を活用できた、極めて充実した期間であったと言える。関係各位に深甚の謝意を表する次第である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①村上謙（2012）「明治期関西弁におけるヘンの成立について―成立要因を中心に再検討する―」（近代語研究 16、pp. 1-14、査読なし）

②村上謙（2011）「近世後期上方における音変化の諸相」(埼玉大学紀要 (教育学部) 60-1、pp. 163-176、査読なし）

③村上謙（2010）「対照表形式の近世後期上方語彙資料」（埼玉大学国語教育論叢 13、pp. 1-10、査読あり）

④村上謙（2010）「明治大正期関西弁資料としての上司小剣作品群の紹介および否定表現形式を用いた資料性の検討」（近代語研究15、pp.101-114、査読なし）

⑤村上謙（2009）「近世上方における尊敬語化形式「テ+指定辞」の変遷」（日本語の研究236、pp.1-14、査読あり）

〔学会発表〕（計２　件）
①村上謙「『手作業』による用例検索を専らとする一研究者が通時コーパスを使ってみる ―動詞否定形式「～ハセヌ」類における上接動詞の通時的なあり方を例に―」（国立国語研究所「通時コーパスの設計」研究発表会，2011年9月16日、国立国語研究所）

②村上謙「明治大正期関西弁資料としての上司小剣作品群の紹介および否定表現形式を用いた資料性の検討」（近代語学会、2009年6月13日、白百合女子大学）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
村上　謙（MURAKAMI　KEN）
埼玉大学・教育学部・准教授
　研究者番号：20431728

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：